

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・二八二八
弊NPOは「憲法を改正、経済力と軍事力の両足で健全な国体を支える国家」を求めます。

《第二十七回観桜会・第二十三回桜湖会》

毎年四月第一土曜日は「観桜会」第二土曜日は「桜湖会」を開催しています。
観桜会は高野川土手に泉川邸を新築から27回目に、第一回は阪神大震災の年でした。桜湖会は大丸百貨店の中庄浜公園保養所が二千人の人員整理のために売却、取得したその春が第一回、今回23回目になります。
観桜会は賀茂御祖神社鴨涯高野川借景、お花見弁当と各種のお酒を戴きます。当初はホテルから屋台を出して戴いていましたが、通報が相次ぎ、簡略して開催続行しています。
桜湖会は海津大崎の桜街道を鑑賞後、中庄浜公園ビラでバーベキュー、知内川の上流で滞留鮎も投網で戴きます。先般、海津大崎桜街道真ん中のホテルを取得しましたので、何時かはお花見ができるかと楽しみます。

京都国立近代美術館

4月6日～6月13日

《ピロツティ・あなたの眼は私の島》

スイスを拠点に国際的に活躍する現代アーティスト、ピロツティ・リスト(1962)の回顧展。五感を刺激する心地よい音楽と、鮮やかに彩られた世界をユーモアたっぷりに切り取った映像によるヴィデオ・インスタレーションは国を越えて幅広い世代の観客を魅了してきました。
本展は身体、女性、自然、エコロジーをテーマとした作品およそ35点で構成。身体や女性としてのアイデンティティをテーマとする初期の短編ヴィデオやヴェニス・ビエンナーレに出品された代表作、自然と人間との共生をのびやかに謳う最新の映像技術を駆使した近年の大規模な映像インスタレーション、美術館の所蔵作品を取り込んだ新作、廃材を活用した屋外作品まで、約30年間の活動の全体像を本格的に紹介します。

私の本棚 おすすめの一冊

粉川 剛

《資本主義はなぜ自壊したのか / 中谷巖著》

本書の著者、中谷巖氏は細川・小淵両内閣時に「新自由主義」と「市場原理主義」に基づき規制撤廃を叫び経済改革を推進した。しかしその後氏は「新自由主義」の行き過ぎからくる世界的な格差の広がり、止めどもない環境破壊、激化する資源獲得競争など多くの問題に直面。日本社会も多くの非正規労働者が存在し貧困率の上昇が大きな社会問題になるといった現実を目の当たりにした。「改革は必要だが、その改革は人間を幸せにできないければ意味がない」と自戒の念を込めて本書を執筆した。氏によれば本書は「懺悔の書」であり「日本経済の再生への提言」だという。
本書の提言には賛否両論があるが今一度日本社会のあり方を各自が熟考する必要があると思う。

土口哲光和尚の説法

《教えを持つて自らを灯とせよ》

二月は、寒さと温かさが繰り返される三寒四温の冬季である。陽春を控えて、光の春ともいわれる。冬風が雲を払って、太陽の強い陽射しを戴くとき、身も心も弾む。その十五日は、仏教の開祖・釈尊が亡くなられた入滅の日、全国の寺院でご遺徳を偲んで「涅槃会」が営まれた。
釈尊はインド・クシナガラ郊外のサーラの林において最後の教えを説かれた。『弟子たちよ。汝らひとりひとりが、自らを灯として自らを頼りとせよ。他に頼つてはならぬ。自灯明。この法(教え)を灯として頼りにせよ。他の法(教え)に頼つてはならぬ(法灯明)。不放棄に精進せよ』と。人は皆、本来の悟りを内に持ち、ものの道理を柱にして生活を営むよう、遺言されている。

季節の家庭料理

田村真紀

《四月 春キャベツとソーセージの煮込み》

〔作り方・四人分〕
春キャベツ六百グラム・ソーセージ二百グラム・バター三十グラム・塩小匙半・白ワイン大匙三・ローリエ一枚・胡椒少々・白ワインビネガー大匙二・レモン汁大匙一・粒マスタード適量
☆ソーセージが味の決め手になるので出来るだけ味の良いものを、数種類合わせて用意する。
春キャベツはざく切りに、ソーセージは切目を入れる。厚手の鍋にバターを溶かしキャベツを軽く炒め、塩、ワイン、ローリエ、胡椒を加え蓋をして弱火で蒸し煮する。キャベツがしんなりしたらソーセージを加え、白ワインビネガーを振り入れ、さらに弱火で十分ほど煮て火を止め、レモン汁を加える。皿に盛りマスタードを添える。

つれづれの記

山崎辰巳

《晩節を汚さぬ人生を…》

「高齢化社会の弊害」。このような表現をすれば、たちまち誤解を招き、お叱りを受けるかもしれないが、近ごろ様々な分野で功成り名を遂げた人生の先輩の方々が、迂闊な失言や不注意による事故を起こして、非難やひんしゅくの的になっている。
自分の年齢を迎えた私自身の行動や判断力を省みても、年齢とともに確実に鈍化し、体力も著しく劣化していることに気づく。人生を生きぬく上で大切なことは、人間としての誇りと自信だが、ひとつ間違えると、奢りと過信に姿を変えて、多くの人に迷惑をかけ、失望を与えることになる。
「晩節」という言葉がある。字のごとく人生の終わりの頃を指し、晩年の節操でもある。与えられ生かされた命。周りの邪魔や迷惑をせず晩節を汚さず、人生を全うしたいものだ。